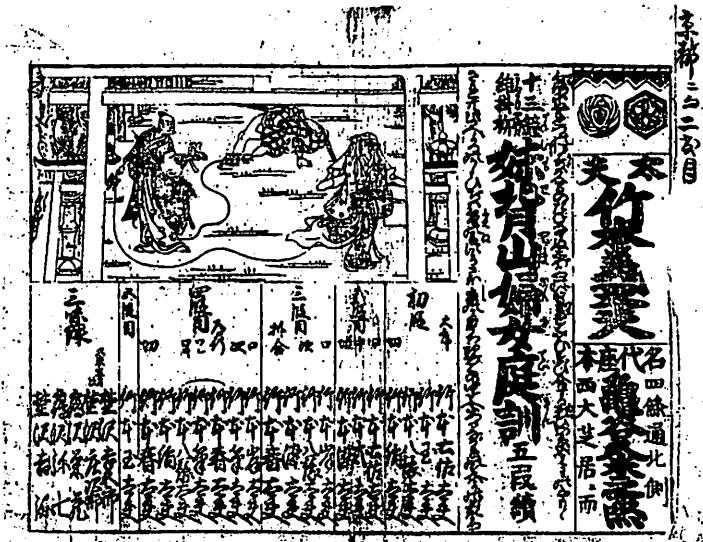


# 国文学研究資料館報

第58号

平成14年3月

編集・発行者 国文学研究資料館  
 東京都品川区豊町一丁目一六〇  
 郵便番号 一四二一八五八五  
 電話 〇三三三七八五七二  
 FAX 〇三三三七八五七〇五  
 URL <http://www.nijiac.jp/>  
 印刷 株式会社三協社



明和八年十一月五月初日、「妹背山婦女庭訓」京都興行の番付  
 (『古今操便覧』所収。14頁参照)

## 目次

高乗勲氏旧蔵古典籍資料の受贈について	落合博志……2
本を〈見る〉仕事	大高洋司……4
上海図書館の「唐才子伝」	堀川貴司……5
ばあぐれいざつきⅢ	原正一郎……6
文庫紹介36：熊本大学附属図書館（永青文庫）	小川剛生……7
古典連続講演・公開講演会及び展示報告 参考室	……8
展示・講演のお知らせ	……9
国際日本文学研究集会報告 情報資料室	……10

シンポジウム コンピュータ国文学報告	データベース室……11
新収和古書抄 平成13年	……12
新収資料紹介48：竹本摂津大掾旧蔵人形浄瑠璃番付集	神津武男……14
—『古今操便覧』など—	……15
彙報・人事異動	……15
平成14年度共同研究・平成13年度共同研究追加	……17
特別共同利用研究員の受入れについて	……18
夏季セミナー受講生の募集	……18
利用者へのお知らせ	……19
平成14年度春・夏季学会	……20

# 高乗勲氏旧蔵 古典籍資料の受贈について

## 落合博志

「徒然草」について多少とも本格的に考えてみようとする者にとつて、高乗勲氏の『徒然草の研究』（昭和43年自治日報社刊）は必ず参照すべき書の一つとなっている。

その第一部をなす校本篇は、烏丸本を底本に約四十種の写本・版本を校合した労作であるが、そこには高乗氏の所蔵本も十点ほど採用されており、特に浄教坊所持本などの非流布本系の写本に、注目すべき異文が含まれることにしばしば気付くことがあった。

それにつけても、その原本の所在が長い間気掛りであった。また永和本の名で知られる「太平記」と「秋夜長物語」の合写本は、複製本も出版されていて高乗氏の蔵本の中では最も著名なものであるが、その行方についても聞く所がなかった。「徒然草の研究」には多数の「徒然草」の写本・版本・注釈書等が高乗氏所蔵として言及されているが、高乗氏の蔵書がど

こかに纏まって入ったという話は聞かず、といつて古書市場に出た形跡もない。どうなっているのか、今でも高乗家にあるのだろうか、と何度も考えたものである。

その内に、光華女子大学日本文学科の助手の松田豊子氏が、高乗氏所蔵『徒然草引歌聞書』を翻刻（平成5年7月「光華日本文学」創刊号）されていることを知り、恐らくこの人は高乗家と何らかの繋りを持つていられるだろう、本消息についても御存知に違いない、と見当は付けたものの、伝手もないまま松田氏に連絡を取ることも能くせず、依然として高乗本の行方については気掛りのままに打ち過ぎていた。

資料館に来て二年後の平成十年、光華女子大学の三村晃功先生がその年度から収集計画委員になられたので、委員会の折に松田氏や高乗氏の所蔵本のことなどをお尋ねしてみた。三村先生は早速松田氏

にお話をして下さり、松田氏もその時点で高乗家に連絡を取って下さったらしいのであるが、私の怠慢から調査に向けた行動に入るのを日延べにしている内に、いつしか二年が過ぎてしまった。その間、三村先生からは学会等でお会いする度に、その後の進展などをお尋ね頂いたりしたが、目先の仕事に追われて中々具体的な行動に移らずにいたのは、今思えば何とも申し訳ない次第であった。

ようやく一昨年四月、意を決して松田氏に初めてお手紙を差し上げた。そして高乗家の住所や御当主のお名前などを教えて頂き、六月九日に京都・紫野の高乗家に御一緒にお伺いすることとなった。

高乗家では高乗氏の令夫人三千枝氏、御当主高乗健氏と奥様の敬子氏に初めてお目にかかった。その日は要覧その他の資料を持参して、資料館の事業の内容と目的などをお話したのであるが、調査のみならず、撮影についてもその場で御快諾頂いたのは何より有難い思いがした。二階の高乗氏の書齋にも御案内頂いたが、部屋も本も二十年前に亡くなられた時のままにしておられるのを見て、心を打

たれるものがあった。

この時は御挨拶のみで辞去し、翌月から調査に入らせて頂くこととなり、七月に二日、八月に一日、三村先生にも加わって頂き三人でカードを採り始めた。しかし九月以降、諸事繁多で身動きが取れなくなり、しばらく間が空いてしまひ御当主に一時御心配をお掛けしたこともあったが、昨年二月に調査を再開、その後はほぼ毎月二三日ずつお伺いして調査を進めて行つた。この間松田氏のほか、二月からは高乗氏を敬愛する名古屋大学の塩村耕氏、また四月からは研究情報部の堀川貴司助教授も参加してくれることになった。

ところで調査に入る以前、松野館長と会話中に高乗家資料の調査のことを話題にした時、館長は即座に、大学院生の頃に高乗氏から「千載集」の写本をお借りし、京都のお宅まで返却に行かれたことをお話し下さった。どこかにあるはずと予想していたその写本が四月の調査の際に見付かったので、それを機に、五月下旬館長が用務で西下された時、四十年ぶりに高乗家を訪問されることになった。その折に御当主から、国文学の研

究に役立つようにと、古典籍類の資料館への寄贈の御芳志をお示し頂いたのは、思いがけないことではあったが、何より喜ばしく、有難くお受けしたことは言うまでもない。

調査の方はその時点までにまだ全体の三分の一程度を終えた所であったが、これ以後はSカードをCカードに切り替えて書目の確認を急ぐこととし、開始から丁度一年目に当たる昨年七月二十一日を以て、一応古典籍全点の調査を終了した。そしてカードに基づいて仮目録を作成し、そこに掲載された資料をお譲り頂くことについて改めて高乗家の御了承を得、十月初めに搬送作業を行った。この時、奥の書棚から更に一一〇点ほどの和本が見出され、結局古典籍（一部文書・書状等を含む）の総数は約六七〇点となった。

なお「太平記」については古典籍類の寄贈のお話のあった段階で、御当主から特に高乗氏の遺愛深い品として引き続き家に残したい御意向が示され、我々ももとより異存はなかったが、この搬送作業の際、併せて当館に譲渡して下さるというお話を頂いた。将来におけ

る保管を懸念されてのことであるが、御英断にはただ感謝申し上げるのみである。

こうして高乗氏旧蔵の六百点余りの古典籍は、「太平記・秋夜長物語」の一点を購入、他は寄贈という形で、すべて当館に収まることとなった。その内容は、主軸となる「徒然草」関係の文献（写本・版本・注釈書・兼好関係諸資料）約一三〇点のほか、歌書・物語・語学・故実・記録、また平安末期の写本を含む仏書など、国文学を中心としつつ多岐に亘っている。当館では、これを高乗氏が研究に使用された各種の資料類とともに、「高乗敷文庫」の名で一括保存する予定である。

来る五月下旬には、この度の受贈を記念し、その披露の意味で「高乗敷文庫貴重書展」が開催される（9頁参照）。それに合わせて行われる講演会のタイトルは、「本と人と研究と―高乗敷文庫から―」というものであるが、これらの本を集め、研究された高乗敷氏の「人」について、松田豊子氏が光華女子大学日本文学会会報（昭和56年3月）に寄せられた追悼の文章から、一節をここに引い

ておきたい。

高乗敷先生は、寡黙の学者であつた。だが、その寡黙は、冗舌を拒否する寡黙ではなくて、冗舌を吸収する寡黙であつたといえよう。学生たちは、泰山の如く仰ぎ、大洋の如く安らいだ。

もつとも、叱責なさるときがないわけではない。女子の好奇心から臆測で他人の噂話や評判に興じていると、即座に、「そんなこと言うものじゃない。」と、鋭くたしなめられる。泰山に雷鳴が轟き、大洋に怒濤が巻くといった迫力で、一座の学生たちは、ちぢみあがつたものである。

高乗先生の学問を理解するのに、私たち学生は、幼稚であり未熟でありすぎた。けれども、その学問の情熱は、それなりに、誰もが感得したはずである。さらに、その人間的な影響にははかりしれないものがある。他人の悪口をいうことが、他人を評価することではなくて、自己の品性を卑劣にすることであることとを、私たちは、先生の叱責によって悟つたのである。―これは、一例にすぎない。

私自身は、生前の高乗氏にお目

にかかる機会を持たなかつたけれども、単に研究者というだけでなく、人間を育てる優れた師でもあつた高乗氏のような人に、できれば出会つてみたかつたと思う。そしてもう一つ、高乗氏の遺された資料を整理する時の松田氏の、恩師への敬慕に支えられた純粹に無私で献身的な姿勢にも、深く打たれるものがあつたことを付け加えておきたい。今回の調査から移譲までの件が円滑に運んだのも、ひとえに松田氏に対する高乗家の方々の厚い信頼に依つてゐることを、ここに明記しておかなければならない。

最後に、高乗敷氏の御冥福を謹んでお祈り申し上げるとともに、これまで度々の調査等の折にいつも変わらず御支援下さつた高乗氏令夫人三千枝氏、御当主健氏と奥様の敬子氏、そして松田豊子氏、松田氏を紹介して下さい、調査の初期に御助力頂いた三村晃功先生、また塩村耕氏に改めて心よりお礼の言葉を申し上げ、報告の結びとす。

（文献資料部助教）

## 本を〈見る〉仕事

大高洋司

和本を意識して〈見る〉ようになったのは、大学院生の頃である。馬琴の説本に興味を湧いて、資料を漁り始めたのは良いが、「里見八犬伝」や「椿説弓張月」などごく一部を除いては、活字翻刻は古いものしかなくて、必然的に原本に当たらざるを得なくなった。最もお世話になったのは国会図書館である。鈴木重三氏の「馬琴読本 諸版書誌ノート」が指針で、片端から借り出しては「ノート」と見比べ、見様見真似で書誌をとり始めた。その内に、大坂の河内屋茂兵衛等の出した粗悪な刷りの求版後印本が圧倒的多数であること、対して初印本はずっと少なく、あつても多くは貸本屋の印が捺され手擦れや落書きに汚れていて、まっさらな、あるいはそれに近い本にぶつかるのはむしろ僥倖に近いことが、少しずつ分かってきた。高木元氏も初印本のもたらす喜びについて何かに書いておられたと

記憶するが、こうして十年ほどの間、私にとって、本を〈見る〉ことイコール読本の善本を探索することであった。

それが是正された、というよりやや違う認識に変化したのは、中村幸彦先生のご蔵書を、ちょうど十年間拝見し続けたことの影響が、きわめて大きいように思う。春秋二度の淡路行きについては、先輩の皆様がこもこも触れておられ、私自身も書き留めさせていただく機会があった（『混沌』二十二号）ので再述しないが、当面のテーマに沿った事柄のみ記せば、中村先生の収書は、ひとつのジャンルや善本に泥むことを意識的に排除しておられたと言つても良いような、質実でそつけない、しかし驚くべき量のご蔵書であった。それでも最初の内は、読本を見て下さいと先生もおっしゃって下さつたし、私の方ももとよりそのつもりで、読本の棚にしか眼が行かなかつた。

しかし、その時々的人员が分担してできるだけ多数の本に風を通す必要があつたために、読本にばかりかかずらわっているわけには、すぐにはいかなかった。結果的に、それが良かった。他ジャンルの本を見るのが怖くなくなり、また一日中、積み上げられた本を開いては次から次へと棒目録に記録し続ける作業を、シンドイけれども価値のある仕事と認識できるようになった。「専門」に対する自意識が、回数を重ねることに薄れていったわけである。

昨年四月来私が国文学研究資料館に在るのは、少なくともいくばくかは、右の歳月の功德かと思つている。しかし現在所属している部署の仕事である、人様に本を〈見せる〉こと、自分が〈見る〉こととの間にはやはり雲泥の開きがあり、こちらも楽しみながら大方に見ていただく余裕などは、およそない。初めて担当した展示も、専家に助けられながら、やつとの思いで切り抜けたという感じである。それで、〈見せる〉ためにはもつと〈見る〉しかないと開き直つて、今心掛けているのは、公私

にわたつて、能う限り現物に接する機会を逃さないことである。手帳のメモを覗いてみたら、四月以来二十ほどの展示に足を運んでいた。その多寡を他と比べようとは思わないが、私自身にとつては記録的な数字で、お陰でしばらく前まで敬して遠ざけて来た鎌倉期の文書などでも、その年記の古さに思わず見入つてしまつたり、あそここの展示の宋版がどうのなどと、人前で臆面もなく口にするようになった。そんなことを松野館長に申し上げると、「そこを超えると、何が何だか訳が分かんなくなつちやいますけど」と一笑された。「そこ」の意味が、鎌倉とか宋版とかを時代的にもつと遡ると、の意味なのか、そのレヴェルを超えると、の意味なのか確かめることをせずにはしまつたが、後者と取つて、ともかくもいったん満腹状態になるまで〈見る〉ことを、現在の目標にしようと思つている。自信を持って〈見せる〉ところまでたどり着くには、さあ、また十年はかかるだろうか。

(整理閲覧部教授)

## 上海図書館の『唐才子伝』

堀川 貴 司

平成一三年八月、上海図書館を訪れた。科学研究費補助金による旧植民地所在の日本古典籍調査の一環として、主に和刻本漢籍を書籍調査するのが目的である。

今回の対象は近世以降の整版本や明治の銅版本がほとんどであったが、そのなかで興味を引かれたものがあつた。正保四年（一六四七）刊『唐才子伝』一〇巻五冊。元代に書かれた、唐の詩人の伝記集である。

それほど刷りはよくないし、今でも古本の市場に出回るくらいで特に珍しい本というわけではない。面白いと思つたのはその巻末に書かれた中国人旧蔵者の識語である。個性的な書体（中村不折を連想させるような隷書）で延々と書き連ねてあり、本書に寄せる熱い思いが伝わってくる。（句読点を補う）

仏生二千九百二

是本、以銀八版、致書上海羅氏蟬隱廬得之。書十卷、与元志合。四庫著録、迺從永樂大典出、

巻帙既不符（僅八巻）、已校此、相差遠甚。今攷閣本、共二百八十七人。此本則并附伝、有三百九十九人多、出一百十二人。其足珍、可不待煩言矣。経籍訪古志著録、亦十巻本、云「前有目錄。題、唐才子伝巻第一西域辛文房撰、葉廿四行々廿二字、左右双辺、界高七寸寛一尺」。此

本刻于正保四年（當中国順治四年）。惟行字数不同、餘並合。彼以有文安己巳朱題（正統十三年戊辰）、定為応永前後刊本。朱墨題識、後人可加。疑為作偽、不甚可据。或其著録之本、不能古於是本、未可知耳。考、正統十三年戊辰為彼土文安五年、明年己巳正統十四年、彼国改元為宝徳元年、是文安無己巳、可知。況扶桑三島、決不有知吾国漢晋時、改元至半載、以疆域遠隔南北開隔、民間尚有不知者。故余深致珍秘。以為、是必不遜於彼、非敵帯。自享取遺家之譏。惟是本前後無序跋。与彼邦人士刻書、

必加序跋、或増題識之常例、不同。致不能定其祖本。

筆者は蔵書印により、王修という民国時代の蔵書家とわかる（同行した陳捷氏の御教示）。書かれたのは一九二〇年代であろうか。

「羅氏」は考証学者として有名な羅振玉の弟、振常。上海で書店を経営していた（陳氏による）。筆者はまず、『元史藝文志』（元代著作物の一覽）の記述と一致するのを確かめ、『四庫全書』（清代に作られた漢籍の一大全集）収録の本は、オリジナルではなく、『永樂大典』（明代に作られた百科事典）から再編集したもので、本書よりずいぶんと詩人の数が少ないことを指摘する。そして、幕末の考証学者森立之の『経籍訪古志』に著録された本とは、書誌的なデータ（行数や字数）が一部合致しないことに気付く。その本には室町時代の識語があり、それを信じれば一五世紀の古版本ということになるが、筆者は後人の偽作ではないかと疑い、自分の本の方が善本に違いない、独りよがりという誇りは甘んじて受けよう、と記す。

した五山版、文安五年の識語も信頼できる（現在台湾の故宮博物院の所蔵で、明治期に來日し、多くの古典籍を發掘・取得した楊守敬の旧蔵書）。また、日本でも正保版本以降、一九世紀初めに幕府儒官の林述斎が五山版をもとに本書を『佚存叢書』に収め、これが済に渡って覆刻され、流布していたので、十巻本は既に知られていた。現在では五山版や元刊本（明刊本の誤りという説もある）に基づいた精密な研究が行われ、日本では『唐才子伝之研究』、中国では『唐才子伝校箋』が刊行されている。したがって正保版本の学術的価値は相対的に低くなつてしまつたが、この識語から読み取るべきは、少しでもいい本を、あるいは自分の知らない本を手に入れようという、本に対する執念と愛情である（序跋がないことを不思議がつている所など、日本の版本の特徴を鋭く指摘している）。森立之や楊守敬・羅振玉、その後の学者たちの努力も、同じ精神に支えられていたに違いない。

その幾分だけでも共有し、人々に伝えていきたい、と強く感じさせられた。（研究情報部助教）

# ばあくれいざつきⅢ (パラダイム・シフト)

原 正一郎

在外研究を終えて帰国してから二年が過ぎようとしている。幸いとかおあいにく様とかいうか、パークレイとの縁は切れておらず、今のほうがあちらの仕事にコミットさせられている。そんな中でパラダイム・シフトという言葉が時々頭に浮かぶ。OECDでparadigm shiftを引くと「a fundamental change (in approach, philosophy, etc.)」とある。方法論や考え方の転換といった意味である。

私はCenter for Japanese Studies (CJS) の客員研究員であったが、実際はLewis Lancaster教授がリーダーであるECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) プロジェクトに間借りしていた。しかしECAIには目もくれず古典文字の認識の研究に没頭していた。ECAIを無視していたわけではないが、実体がよく分からなかったので遠慮していたのである。CJSとECAIとInternational and Area Studies (IAS) と密接な関係があると言

われたので、IASのホームページ (<http://ias.berkeley.edu>) を覗いてみたがよく分からない。ひょんなことからIASのDeanであるDavid K. Leonard教授にお会いする機会が何回もあり、IASについて説明していただいた。教授の言葉を借りると「従来の学部を縦糸とすれば、IASは地域という横糸で学部を横断するバーチャル学部」だそう、大学の機構改革の一翼を担っているとのこと。何となく分かった気がした。

さてECAIであるが、詳細はWebサイト (<http://ecaio.org>) を読んでいただくとして、デジタル地図をベースとした、新しい研究パラダイムの開拓を目指したIASのプロジェクトである。GIS (Geo-Information System) の人文科学への適用、あるいはデジタル人文地理学とも言えよう。ECAIと(狭義の) GISの違いをシステマ的視点から見ると、ECAIは位置情報に加えて時間情報を重視している。

データクリアリングハウスの構築などデータウェアに力を入れていることである。しかしメタデータによるデータ統合と可視化ソフト (TimeMap) が面白そうであることを除けば、特筆すべき点は無いと言えなくもない。日本のGIS研究者の方もっと洗練されたツールを開発している。

そのような斜に構えた見方ではなくECAIで注目すべきは、人文科学系研究者が中心となって組織した国際的プロジェクトであり、そこに学内外の多数の情報系研究者や技術者も参加して、活発なコラボレーションを展開していることである。日本においても、情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」のように、情報科学系と人文科学系の境界領域を対象とした幾つかの研究グループが活動しており、新聞で紹介されるような成果も上げつつある。しかし規模が小さく、その成果も曲解されたり批判されることさえある。国文学研究資料館においてもコラボレーションは限定されている。彼の差は大きいと感ずる。

さてECAIのパラダイムであるが、遺跡・史料・言語・境界線な

どの対象を位置(緯度と経度さらに高度)と時間の三(あるいは四)次元座標として地図上に登録する。書物なら書誌情報を頼りに検索できるが、考古や民俗となると書誌的情報は役に立たないし、人文科学全般を包含した情報体系は確立されていない。かろうじて位置と時間が全ての対象に共通している。情報は位置と時間により検索される。例えば「紀元前二〇〇〇年ころのインダス川流域」といった具合である。該当する時代・地域の河川図と遺跡分布データなどが登録されていれば、個別に形成されたデータであっても地図上に統合・表示することで新しい俯瞰を与えることができる。これは新しい研究パラダイムである。多様なデータがECAIデータクリアリングハウスに登録されるにつれて、新しい知識が発見される可能性が高くなる。このような新しいパラダイムの提案が日本、特に人文科学領域では少ない印象を受ける。「国文学研究資料館も新しいパラダイムの発信につながる研究を積極的に推進できれば」と思っているが……。

まあ我々も手をこまねいている

ばかりではない。Dublin CoreのZ39.50をベースにしたメタデータベースシステムを開発中である。国文学研究資料館の館蔵資料目録、論文目録、史料所在目録、画像データ、動画データ、古典本文、OPACについては、単一のインタフェースで一括検索できるようにする。国文学研究資料館外のデータベースにも同じ検索法が使えるように、人文科学系大学共同利用機関などとの共同研究にも着手した。最後に、私はECAJ Japan TeamのEditor (にやせられた) であるが日本人の活動は皆無に等しく肩身の狭い思いをしている。そんなお、ECAJ、PNC (Pacific Neighborhood Consortium: <http://pnclink.org/>)、情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」、EBTI (Electronic Buddhist Text Initiative) など、人文科学へのコンピュータ応用を進めている研究グループによる国際的なJoint Conferencesが、今年の9月に島根県立大学と大阪市立大学を会場に開催される。国文学研究資料館をはじめ、人文科学とコンピュータに関心のある方々の積極的な参加をお願いする次第である。(研究情報部助教)

文庫紹介 36

熊本大学附属図書館 (永青文庫)

外様大名の雄、旧熊本藩主細川家の蔵書は、明治維新後、熊本市中心部南側の山麓に位置する細川家の北岡旧邸に移され、「お文庫」「川端お倉」「御神庫」「御宝庫」「七間御蔵」と号する五つの倉庫に保管されていた。北岡文庫の名称はここ由来する。昭和二五年、財団法人永青文庫が設立され、昭和四〇年前後、北岡文庫の典籍・古文書は相次いで熊本大学附属図書館に寄託され、広く閲覧に供されることとなった。

これらの総計は四三八七点にも及んでいるが、歴代藩主遺愛の典籍のうちでは、文雅に心をひそめた細川藤孝(幽斎)の手沢本が最も著名なものである。とりわけ幽斎が文禄・慶長の交、集中的に書写した歌書・歌合は、中世歌学の到達点を示すとともに、「和歌六部抄」などの底本となったことから知られるように、近世歌学の淵源ともなった。

これらの典籍・古文書は、細川藩政史研究会の手によって全体の目録化が進められ、「永青文庫細川家旧記・古文書分類目録」正篇・続篇が編纂された。この目録は、熊本大学附属図書館ホームページ上でも公開されている (<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/~asei/>)。また幽斎関係の文学書については「北岡文庫蔵書解説目録」(昭和三六年、続編は「法文論叢」一五掲載) が詳しく、多くは「細川家永青文庫叢刊」に収められて影印刊行されている。歌書類には、その他、歴代藩主の蔵書とともに、八代重賢に重用された竹原勘十郎支路らの藩士が関係したのも多数含まれている。

閲覧には、永青文庫理事長の紹介が必要で、閲覧・撮影の別、資料名、利用目的等を明記して申し込む。許可が得られれば、許可書と一緒に熊本大学附属図書館長宛の紹介状が送付されるので、それを添えて、熊本大学附属図書館長宛に利用願を提出すること(書式は自由)。開館日・時間は月曜日から金曜日(第四木曜日は休館)、午後九時から四時半まで。なお上記目録に掲載されている典籍でも美術・工芸品とともに東京に移されたものもあるので注意されたい。財団法人永青文庫、〒112-0015 文京区目白台1-1-1、電話〇三三九四一〇八五〇、FAX 〇三三九四三〇四五四。熊本大学附属図書館、〒八六〇-八五五五 熊本市黒髪二丁目一、電話〇九六-三四二二二六、FAX 〇九六-三四五九〇八七。

(文献資料部・小川剛生)

当館では昨年、八代藩主細川重賢ゆかりの古典籍一点を収蔵しました。「新収和古書抄 平成十三年」(本誌13頁)を御参照下さい。

## 平成十三年度講演および展示報告

### 連続講演 西鶴(全五回)

昨年度好評を博した「岩佐美代子の語る『源氏物語』」の後を受けて、当館における古典連続講演は、今年度以降も引き継がれることになった。

今回は王朝物語から近世の西鶴へとテーマを移し、講師を当館名誉教授長谷川強氏にお願いした。主著『浮世草子の研究』・『浮世草子新考』を始め、西鶴とその周辺に広々とした展望を持たれ、常に正統的なアプローチで近世小説の研究を先導して来られた方である。またかつて文献資料部長を務められて、当館とはきわめてご縁が深い。

実施されたのは、九月末から十一月下旬にかけて、ほぼ二週に一度のローテーションである。それぞれの具体的な日時と題目は、次のようであった。

#### ①九月二十八日(金)

#### 第一 その人と時代

—かゆき所へ手のとゞくやうにあらん人がら—

#### ②十月十二日(金)

#### 第二 近世小説のはじまり

—「好色一代男」たはぶれし女

三千七百四十二人—

#### ③十月二十六日(金)

#### 第三 貞享の西鶴

—慰み草を何がなと尋ねて—

#### ④十一月九日(金)

#### 第四 武家物の面白さ

—諸国に高名の敵うち—

#### ⑤十一月二十二日(木)

#### 第五 「永代蔵」の町人

—聞伝へて日本大福帳にしるしこの内③は、当初のプログラム



長谷川強氏(連続講演 西鶴)



河添房江氏(源氏物語とジェンダー)

から変更して挿入された。これによって最終回に予定の「第五 受容と評価 江島其碩 滝沢馬琴」が抹消され、長谷川氏ならではの西鶴受容のお話がかげえなかったのは残念だったが、その代わりに、好色物・雑話物・武家物・町人物の全てのジャンルにわたって、「長谷川西鶴」が語られることになった。

学会などではすでにお馴染みの、飄々淡々としたお話ぶりながら、常にB4版で十枚ほどの資料が用意され、これに即して、時に聴衆を笑いの渦に巻き込みながら、毎回時間の不足が惜しまれるほど、

清新でスケールの大きな議論が展開された。全ての回に共通していたのは、特に現在の要素を強調せず江戸時代というワクの中に置いたとしても、それで西鶴の価値が微塵も揺らぐわけではないという、静かで強い碩学の自信だったと思う。

各回とも、研究者、院生、学生を含め、定員を超える来聴者があつたが、一般の方々が、軽妙で要を摘んだ長谷川氏の作品解説に、熱い共感を示して聴き入っておられるのが印象的であった(なお講演の内容は笠間書院から刊行され、以後シリーズ化の予定)。



今回は、連続講演の内容に合わせ、通常展示「近世前期の文学―小説を中心に―」（十月一日～十一月十六日）も行った。仮名草子・浮世草子に代表される、いわゆる近世小説とその周辺の散文に、韻文・芸能・実用書を加えて、江戸時代最初の百年間の流れを通観できるように考えた。講演会の前日・当日には、「好色一代男」を始めとする当館蔵の貴重本も加え、三回のギャラリートークを実施したが、こちらにも多くの方が参加して下さったことに、心から感謝している。（参考室 大高洋司）

#### ジェンダーの生成

平成十三年五月十八日（金）に、第五十七回公開講演会として、当館において「ジェンダーの生成」というテーマで開催した。講師・及び演題は次の通りである。古今集の「ことば」の型

―言語表象とジェンダー

実践女子大学文学部助教授

近藤みゆき氏

女が和歌を書くとき

―女懐紙をめぐる―

早稲田大学文学部教授

兼築信行氏

#### 源氏物語とジェンダー

―和漢のはざま―

東京学芸大学教育学部助教授

河添房江氏

講演はいずれも熱のこもった充実した内容であり、会場には定員を超える多数の来聴者があつた。さらに当日インターネットによるライブ中継を行い、そこにも多数の利用者があつた。現在当日の模様を動画で部分的に当館ホームページ上で公開しているので、ご覧いただきたい。また講演者による講演資料もホームページ上で公開した。当日御来聴下さった方々、またホームページを通してアクセスして下さった方々に、厚く御礼申し上げます。

なお当日は通常展示「和書のみざま」を展観中であつたが、兼築教授の講演内容に合わせて、早稲田大学蔵「続古今和歌集竟宴和歌」一巻をも展示した。

この講演の内容は、従来と同様に、国文学研究資料館編古典講演シリーズ「ジェンダーの生成」として、一昨年の講演等も加えて、本年三月に臨川書店から刊行されている。（参考室 田淵句美子）

### 「和書のさまざま」のお知らせ

通常展示「和書のさまざま」を、3月18日（月）から4月26日（金）まで行っています（土日祝日及び3月25日から30日は休館）。この展示は、当館で昭和五十九年以来恒例となっており、日本の古典籍のさまざまな形態を紹介する書誌学入門的な展示です。場所は当館2階の展示室、時間は9時30分～16時30分です。短大・大学の学外講義などにもご利用いただければ大変幸いです。ご来観をお待ちしております。なおご来観いただけない方には、当館ホームページのヴァーチャル展示でご覧いただくこともできます。

### 春期公開講演会及び展示「高乗勲文庫貴重書展」のお知らせ

次回の公開講演会は、「本と人と研究と―高乗勲文庫から―」というテーマで、本年5月24日（金）1時半より、国文学研究資料館大会議室で開催します。講師・演題は左記の通りです。申し込みは不要ですので、直接会場へお越し下さい。

「立志格勳の国文学者―序に代えて―」

当館 松野陽一館長

「高乗勲氏蒐集の古典籍―「徒然草」関係資料その他―」

当館文献資料部 落合博志助教授

「永和本『太平記』をめぐる」

中京大学文学部 長谷川端教授

また、5月20日（月）より31日（金）まで（土日休館）、今回当館所蔵となった、永和本『太平記・秋夜長物語』をはじめとする高乗勲文庫の典籍の数々を展示します。高乗勲氏旧蔵書の受贈の経過については、本号の落合博志の文章（2・3頁）をご覧ください。多数の方々の御来聴・御来観をお待ちしております。

## 第25回国際日本文学研究集会報告

平成十三年十一月十五日(木)

一六日(金)の両日、「造形と日本文学」というテーマで開催され、絵画・工芸・映画など、様々な造形美術との関連から、日本文学が多角的に論じられた。参加者は一九名、うち海外からは三五名だった。プログラムは以下の通り。

## 【第1セッション】

◆箱の中の謎―反―探偵小説としての安部公房の「箱男」―

マーガレット・キー(インディ

アナ大学大学院博士課程)

◆大江健三郎の文学におけるタル

コフスキーの反響

セルゲイ・チロノフ(在日ロシア連邦大使館員)

◆【第2セッション】

◆「万葉集」巻頭の「雄略歌」について

徐送迎(高崎経済大学講師)

◆中世日本文学における舍利信仰

ブライアン・ルバート(イリノイ大学助教授)

◆【第3セッション】

◆一三世紀半ばにおける文学作品の絵画化観―源氏絵陳状をめぐる

エステル・レジエリーボーエル(フランス国立東洋言語文化研究所助教授)

◆葦手絵と和歌と―冷泉家時雨亭文庫の「元輔集」をめぐる―

クレール・碧子・ブリッセ(パリ第7大学助教授)

◆【第4セッション】

◆「朝鮮太平記」と「伽婢子」の挿絵の類似性

朴賛基(木浦大学校副教授)

◆抱一の俳画とその背景―吉原月次風俗図を中心に―

井田太郎(早稲田大学大学院博士課程)

◆江戸時代後期における文学の消費―根付から岳亭定岡まで―

マティ・フォラー(ライデン国立民族学博物館学芸員)

◆【第5セッション(公開講演)】

◆文学教育と映像メディア

木越治(金沢大学教授)

◆「浦島伝説」から「浦島子伝」への発展について―亀、蓬莱山、玉手箱―

嚴紹璽(北京大学教授・国文学研究資料館客員教授)



## 学研究資料館客員教授)

これらの内容を収めた会議録は三月刊行。また、次回第二十六回は国文学研究資料館創立三十周年記念と銘打ち、「文化のなかの文学、文学のなかの文化―文学研究

の可能性―というテーマで、本年十一月十四日(木)十五日(金)の両日に開催する予定。参加および研究発表応募の要領は当館ホームページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)を御覧下さい。(情報資料室)

## 国文学研究資料館

## 「第七回 シンポジウム・コンピュータ国文学」開催

## 国文学研究のインフラストラクチャ

## — 21世紀のモノ作りたち —

国文学研究資料館では、平成十三年十二月七日（金）に、第七回の標記シンポジウムを開催した。

今回は、「国文学研究のインフラストラクチャ—21世紀のモノ作りたち—」というテーマのもとに、国文学研究の基盤に関わる情報群の生成に携わってきた「モノ作りたち」からのメッセージを届けることを主眼とした。

研究に必要な資源には、文字や画像など多彩な記述形態を持つものも少なくない。近年の研究動向では、こうしたものも視野に入れた多角的かつ複合的な目配りが求められている。資料の保存などの観点から考えれば、機械可読化電子テキストによる研究資源の整備と提供は、急務の課題といえよう。最近とみに脚光を浴びているXMLの古典文学本文への応用や、研究文献および展示目録のデータベース化などについて、最新の成果

の講演がおこなわれた。海外における日本語テキストの利用状況についても、興味深い報告があった。

なお、すべての講演は、インターネットでライブ中継した。会場に來れない多くの方々にも参加していただけた。のべアクセス数からの推定ではあるが、三〇〇人弱の視聴があった。国文学研究資料館のイベントのネット中継は、今回で三回目となる。情報発信技術の一つとして、これで確立したことになる。また、講演資料などは、国文学研究資料館のホームページでも公開している。

時代の趨勢としてのペーパーレス化に対応すべく、印刷物としての『講演集』は、昨年度よりインターネットを通しての閲覧に移行している。ご理解とご協力のほどを、よろしくお願いいたします。

## 【講演内容】

- ・XMLの古典文学本文への応用  
（国文学研究資料館・野本忠司）
- ・汎用的な本文データベースシステムの構築  
（早稲田大学（非）・大内英範）
- ・研究文献目録のデータベース  
（国文学研究資料館・入口敦志）

- ・コンピュータ大学（院）・ジョナサンズウィツカー  
（展示目録のデータベース化）  
（天理大学・山中秀夫）
- ・日本語テキスト・イニシアチブ  
（ピッツバーグ大学・野口幸生）
- （データベース室・伊藤鉄也）



新収和古書抄 平成十三年

うつほ物語 古活字版 大本二冊

無刊記、(寛永)頃刊。栗皮表紙。

毎半葉一一行、一行二一字前後。

内題「うつほものかたり上」、「う

つほ物語下」。柱題「うつ上(下)」。

上巻四六丁、下巻三四丁。内容は

俊蔭巻。「なみた河ふちせもしら

ぬみとり子をしるへとたのむわれ

や何なる」で「上巻終」とし、下

巻末は「其後いとめてたき御あそ

ひおほかりけり」とある。「校本

うつほ物語」の「第一類木活字本

系統木活字本第一種」に該当する。

三十六歌仙絵巻 卷子本 写一軸

(江戸中期)写。二七・六×九

七五・〇糎。三十六歌仙歌人の姿

絵と、位署・略伝並びに詠歌一首

を記したるもの。万里小路藤房を伝

承筆者とする藤房本系歌仙絵で、

世上有名な佐竹本に対して、藤原

元真と在原行平を入替える点で顕

著に異なる外、所載歌も一三首異

なる。藤房本原本は断簡九点が伝

存するのみで、完本の模本も、パ

ブリックライブラリーと神宮文庫

の二本のみ知られる状況に、稀少

な一伝本を加える。

仏果園悟真覺禪師心要

大本 刊二冊

(江戸初期)刊。早印。四巻

(上始・上終・下始・下終)四冊

を二冊ずつ合冊する。改装茶洪色

無地表紙、二七・九×一八・二糎、

四周双辺有界一一行。原刊記「助

縁 僧興乗/尼昌一/皆曆応四年

十月日 臨川寺刊行」。南北朝初

期の五山版に訓点を付して覆刻し

たもので、版面は古版本の面影を

伝える精刻。古い蔵書印三種、享

和三年遠江国永島郷明心寺の僧義

転の取得識語のほか、三井家、宝

玲文庫の印がある。虫損やや多し。

(ワ三一一〇二一一、一一)

脈語

大本 刊一冊

朽葉色表紙。二六・七×一九・

〇糎。一〇行一八字詰。刊記「慶

長壬寅冬日南至 富春堂新刊」。序

「万曆丙戌上元日」。蔵書印「竹田

定賢」。古活字版。中国明代の医

書の和刻で、著者は呉崑。二巻。

本和刻本には、他に慶長一三年版、

元和五年版およびその覆刻などが

あるが、当該本はそれらの最古版。

また富春堂は古活字版「太平記」

の版元としても知られる。

きりかみ曾我 大本 刊一冊

丹緑本。表紙、黒色正菱繫牡丹

唐草空押文様、寸法二四・七×一

七・〇糎。外題なし。内題「きり

かみ曾我」。版心「切曾(丁数)」。

毎半葉一〇行。漢字平仮名文・ル

ビ有り。挿絵、片面全七図、その

内最終一図に着彩なし。無刊記。

寛永頃刊。

安楽庵策伝短冊幅

写一軸

上部に詞書「あまりに御とを

くしらの色を申伸候」とあり、

「すかたこそ小兵なれとも武士の

わさをはなすの与一そとさく 策

伝」と記す。寛永十一年五月二十

一日に「茄子にそへて西洞院殿へ」

贈ったもの。返歌は「武士のやさ

しくはみし名をえたるなすの与一

のいかめしきまで 円空」(策伝

和尚送答控)とある。策伝は同日

から翌日にかけて茄子に添えて、

岡田将監、長嘯子、良想親王、近

衛信尋などにも歌を送っている。

策伝晩年の交流を示す一資料。

吾吟我集 大本 刊二冊

原装縹色亀甲唐花繫地巻龍文錦

出表紙、二七・一×一七・四糎。

後補書題籤左肩「吾吟集 上(下)」。

無辺、毎半葉一〇行、丁付はノド

中央、綴じ目に隠れる。刊記「於

洛陽四条寺町/前川権兵衛尉梓

板」。印記「游馬館/園書」ほか

一顆(印文不明)。全一〇巻。石

田未得著。本の体裁、書名・部立

等古今集のパロディ仕立てにした

狂歌集で、慶安二年四月の序があ

る。本書は伝来稀な初版早印本。

(十二一三八九一一、一一)

奥州一見道中 卷子本 写一軸

宗因自筆。外題なし。黄土色無

地絹表紙、見返し間似合紙布目型

押銀砂子散らし、本文料紙鳥の子

紙五枚継ぎ、一八・五×約一九〇

糎。書名は内題による。寛文二年

の奥州紀行における「はや船にの

れとや月のすみた川」以下、主に

名所を詠んだ連歌発句(俳諧も交

える)三八句を記したるもの。この

ときの紀行文「陸奥塩竈一見記」

(校註俳文学大系七所収本)や

「宗因発句帳」に収めない句もあ

り、今後の比較検討が待たれる。

細川重賢公他百韻付句

半紙本 写一帖

檀紙に松・牡丹などを濃彩で描いたくるみ表紙(汚れ多し)、見返し雲英引き銀砂子散らし(銀はほとんど剥落)、本文料紙布目型押の間似合紙、二二・〇×一六・九種。一六丁(末一丁遊紙)、列帖装。裏見返に所蔵者の識語(「宇土/榎嶋氏/蔵本」)あり。安永六年二月三日に熊本藩江戸藩邸内の表海楼において、「面白し雪にやならむ冬の雨」(芭蕉)を警句として興行された点取百韻俳諧の点帖で、逸志(局庵)の点が付いているもの。出水叢書二二『俳諧集』(汲古書院、一九九四)にこの時の他の点者による点帖(永青文庫蔵)が翻刻されている(七三「百韻」)。本書は藩主の手元を離れて支藩の宇土藩の藩士の家に伝わったと思われる。大名の文雅を偲ぶ好資料。

祝昆布君を松前 中本 刊一冊

黄表紙。柱題「おつとせい」。安永六年刊。原表紙なし。十丁。十丁裏欠。鳥居清経画。江戸・松村屋弥兵衛板。松前の昆布漁、おつとせい、数の子、蝦夷王が松前

商人と蝦夷錦の取引をする等、北辺の話題を描く。松前藩の抜荷や田沼意次の蝦夷地開発の風聞が創作の契機となったと思われる。安永六・七年の松村板黄表紙に、題簽のみ役者似顔絵、中身は黒本のようない類型的顔立ちで描かれ、外題と柱題が異なる作品群がある。

吾妻曲狂歌文庫 大本 刊一冊

赤茶色表紙。二七・〇×一八・一種。題簽「天明新鍋五十人一首」吾妻曲狂歌文庫 完」。刊記「天明六載丙午春正月/江戸通油町南側耕書堂為屋重三郎寿桜」。

宿屋飯盛撰、北尾政演(山東京伝)画の色摺り狂歌絵本。天明六年為屋重三郎刊。当代の狂歌師五〇人の狂歌入り歌仙風画像集で、時好に叶い、大いに人気を博した。当該本は、初印本と目され、摺りや色のコンディションも良好な一冊。(ナ二一三九二)

百人一首古今狂歌袋 大本 刊二冊

丁子引布目に千鳥文様表紙。二六・六×一七・八種。題簽「□□首」古今狂歌袋」。副題簽「引書目録」。刊記「書肆 東都本町筋

北エ八町目通油町 為屋重三郎梓」。奥目録「古今狂歌袋」以下一〇点。宿屋飯盛撰、北尾政演画の色摺り狂歌絵本で、「吾妻曲狂歌文庫」の続編。天明七年、為屋重三郎刊。前作に対し、荒木田守武、半井ト養、暁月坊(冷泉為守)などの古人を大幅に増補し、また当代の狂歌師も若干、追加して、計一〇〇人としたもの。当該本は奈良花丸などを影替えた後修本で、初印本の都立中央図書館本と比べ、色摺りの数が一色少ない。(ナ二一三八八)

白藤源太談 中本 刊三冊

合巻、山東京伝作、文化五年正月、鶴屋喜右衛門刊。初印。京伝全集版解題(棚橋正博氏)に合巻仕立二冊本、黄表紙仕立七冊本が確認され、半紙本仕立二冊本の存在が推定されているが、当館蔵本はそのどれでもない。表紙は藍鼠色地。中央やや右寄りに、黒白二色・二行で藤の花に似せた「しらふじ」の絵文字。題簽左肩、外題「白藤源太談 上(中・下)冊」。

サイズは普通の合巻よりやや大きく、一見して中本型説本の体裁と分かる。料紙も厚手。同じ作を四

つの異なる装丁で刊行した事例は、同年の他の合巻にも見られる(棚橋氏)が、この時期のジャンル区分の揺れを示して注目に値する。

嘉永期大小曆 一枚もの六種

嘉永三年から六年の大小曆六種。浄瑠璃番付、俳諧摺り物、「源氏」玉璧の詞に見立てたものなどがあ。浄瑠璃番付見立ての曆は珍しく、当時の太夫・三味線弾きの名が知られる。(ユ九一三五、四〇)

平戸山鹿家積徳堂文庫の調査

現在当館では、山鹿素行手沢本を核として、平戸藩に仕えた歴代当主や門人の著書・蔵書を伝える、積徳堂文庫蔵書の調査を行っております。この文庫は、故阿部隆一氏により目録が作成され、故川瀬一馬氏により再調査が実施されていますが、今回は現当主山鹿高清氏の御厚意により、重要文化財に指定されている自筆稿本を除く約千点を当館にお貸し出しいただき、大東急記念文庫の岡崎久司氏・村木敬子氏の御協力のもと、一点一点書誌を取りつつあります。詳細は、いずれ当館報にて御報告いたします。

## 新収資料紹介 ④

## 竹本撰津大掾人形浄瑠璃番付集

『古今操便覧』など

竹本撰津大掾（天保七年～大正

六年）は、人形浄瑠璃文楽の明治期を代表する太夫である。同人旧蔵の、人形浄瑠璃番付集を、国文学研究資料館が平成十年秋に購入した（館報第五十二号「新収和古書抄」に既報。また平成十一年五月の収蔵資料展で公開）。

同資料は、近世期（最古は元文三年十月、最新は安政六年十一月）の人形浄瑠璃番付を集成したものである。番付を、折本様の台紙に貼付した貼込帳二冊、山折にして袋綴じに纏めた糸綴本六冊から成り、枚数にして五百枚弱を数える。なお糸綴本の内、一冊は、他の五冊と編集方針が異なるので、別個に纏められたと考えられる。貼込帳は「古今操便覧」、糸綴本五冊は「新竹のふし」と、題簽にある（糸綴本残り一冊は、題簽がない）。各篇の編集時期は、所収番付の最新年限から、「古今操便覧」は寛政期後半、「新竹のふし」は天保期、無題簽本は安政期、と推考で

きる。

書誌的形態も編集方針も異なる三種の番付集であるが、各冊いずれにも残る署名から、竹本撰津大掾（前名・二世越路太夫）の旧蔵と判る。なお撰津大掾以後、資料館に収まるまでの来歴は不明である。同資料の価値について、以下に記す。

近世期の、義太夫節による人形浄瑠璃興行史は、「義太夫年表近世篇」（八木書店、昭和五十四年）平成二年。以下「年表」に集成されている。「年表」は、「昭和二年に刊行された『近世邦楽年表 義太夫節之部』の改訂を意図」（同書凡例）して、収録の資料・興行数を大幅に増補した。

番付集の、三分の二は、「年表」に記載のある、既知の興行である。残りの三分の一は、はじめて確認された異板や、従来日記などで知られていた興行の番付新出などである。中でも今回新たに知られた番付は三十四枚を数えるが、この

点には少し説明を加えたい。

「年表」は最終的に、「近世邦楽年表」（以下、「邦楽年表」）の基となった原資料群を把握し切れなかった点を、課題として残した。結論から述べると、撰津大掾旧蔵番付集こそ、「邦楽年表」の原資料の大きな部分であった。

「年表」は、「邦楽年表」の原拠を確認できない興行に関して、東京芸術大学附属図書館（旧・東京音楽学校）、「邦楽年表」の刊行母体）に残された「芸大カード」を資料とした。しかるに「年表」完結後、早稲田大学演劇博物館で、「芸大カード」の直接の典拠と思われる、黒木勘蔵旧蔵の透写番付が発見された（『演劇研究』第九号、第二十一号に、黒石陽子氏の調査報告がある）。

黒木透写番付は、「古今操便覧」の書き込み（二枚の番付を繋ぐ、「笠」のような図形など。本館報一頁掲載の写真参照）をも、写す。また「古今操便覧」の、明和四年五月・京都竹本座「源平二張弓」初演番付の左端に、下張りの一葉が露出し、それに「板元西宮新六」との記載がある。黒木番付（早大

演博・ニ24―89―198）は、欄外左下に「板元西宮新六」と記す。京都興行の番付を、江戸の板元が刷ることは、あり得ない。「古今操便覧」が、黒木番付の原本であることは、明らかである。

前述した新出番付三十四枚の内、黒木透写番付の形で紹介された分を除く、十七枚十四興行がまったくの新出である。

細目の紹介はまだ将来のことであるようだが、番付集は、閲覧可能である（『古今操便覧』は、貴重書指定で、請求番号「99―92」。糸綴本二種は普通本で、無題簽本は、「古今操番付集」の書名で、請求番号「ナ7―47」。『新竹のふし』五冊は、「古今操便覧 新竹のふし」の書名で、請求番号「ナ7―48」）。

昭和二年「邦楽年表」刊行から七十四年後の今、漸くその原資料群が把握されるに至った。今回、国文学研究資料館に収蔵された、この資料が広く利用されることによって、人形浄瑠璃の興行史に新しい光があたることを期待したい。（国文学研究資料館、日本学術振興会特別研究員・神津武男）

彙報

・委員会日誌・

平成13年

8月10日 大学院設置準備委員会

9月12日 大学院設置準備委員会

9月20日 情報システム専門委員会

9月28日 原本テキストデータベース委員会

10月4日 独法化問題検討委員会

10月9日 大学院教育協力委員会

10月23日 自己点検・評価委員会

10月26日 文献資料調査員会議(中国・四国地区)

11月9日 館報紀要委員会

11月9日 文献資料調査員会議(九州地区)

11月14日 ホームページ委員会

11月15日 国際日本文学研究集会委員会

11月27日 共同研究委員会

12月4日 館報紀要委員会

12月10日 自己点検・評価委員

12月20日 国際日本文学研究集会

12月26日 大学院設置準備委員会

平成14年

1月16日 大学院設置準備委員会

1月29日 共同研究委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

1月29日 共同研究委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

2月1日 原本テキストデータベース委員会

料調査

期 間 平成13年8月26日

平成13年8月29日

岡 雅彦・谷川 恵一

齋藤 希史・堀川 貴司

渡航先 中国

目的 旧植民地所在日本書籍の重点資料の本文

研究と総合解題目録

作成のための現地資料調査

料調査

期 間 平成13年8月26日

平成13年9月1日

大高 洋司・人口 敦志

渡航先 中国

目的 大連図書館蔵日本書籍の調査・収集

期 間 平成13年8月30日

平成13年9月3日

野本 忠司

目的 渡航先 アメリカ合衆国

野本 忠司

目的 ACM SIGIR (国際会議)にて研究成果の発表

期 間 平成13年9月8日

平成13年9月16日

安藤 正人

目的 渡航先 ドイツ・イギリス

「広域領域分野資料の横断的アーカイブ

期 間 平成13年9月8日

平成13年9月24日

期 間 平成13年9月30日

目的 渡航先 スロバキア

ズ論に関する分析的

研究」の実施

期 間 平成13年9月22日

平成13年9月30日

安永 尚志

目的 渡航先 フランス・イタリア

国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化

と発信に関する調査

研究

期 間 平成13年9月30日

平成13年10月13日

原 正一郎

目的 渡航先 アメリカ合衆国・

イギリス

人文科学研究支援コ

ラポレーション機能

に関する実証的研究

期 間 平成13年10月9日

平成13年10月24日

和田 恭幸

目的 渡航先 台湾

台湾大学に所蔵され

る日本古典籍の調査

期 間 平成13年9月24日

平成13年9月30日

大高 洋司

目的 渡航先 スロバキア

在外日本関係書誌に

目的 渡航先 スロバキア

在外日本関係書誌に

関する状況調査並びに情報収集	平成13年9月24日〜平成13年10月1日	谷川 恵一・山下 則子	渡航先 イタリア	目的 在外日本古典籍の調査及び打合せ	期間 平成13年10月7日〜平成13年10月14日	齋藤 希史・田渕句美子	渡航先 フランス	目的 パリ東洋語図書館所蔵和刻古典籍の調査	期間 平成13年10月8日〜平成13年10月14日	入口 敦志	渡航先 中国	目的 中国東北部に残存する日本古典籍に関する調査と研究	期間 平成13年10月9日〜平成13年10月17日	松野 陽一	渡航先 台湾	目的 台湾大学図書館所蔵の日本書籍についてのマイクロフィルム	期間 平成13年10月17日
撮影、取得、利用条件の協議	平成13年10月14日〜平成13年10月16日	新藤 協三・松村 雄二	渡航先 台湾	目的 旧植民地所在日本書籍の重点資料の本文研究と総合解題目録作成のための現地調査	期間 平成13年10月29日〜平成13年11月5日	江戸 英雄・相田 満	渡航先 台湾	目的 旧植民地所在日本書籍の重点資料の本文研究と総合解題目録作成のための現地調査	期間 平成13年10月29日〜平成13年11月6日	鈴木 淳	渡航先 フランス	目的 在ヨーロッパ日本関係資料の研究	期間 平成13年11月17日〜平成13年12月14日	中野真麻理	渡航先 フランス	目的 中野真麻理のマイクロフィルム	期間 平成13年12月14日
フランス東洋言語文化研究所所蔵和刻古典籍の調査	平成13年11月10日〜平成13年11月18日	松野 陽一	渡航先 韓国	目的 韓国国立中央図書館蔵旧総督府本の調査研究打合せ	期間 平成13年11月25日〜平成13年11月27日	小川 剛生・山下 則子	渡航先 韓国	目的 韓国国立中央図書館蔵旧総督府本の調査研究打合せ	期間 平成13年11月25日〜平成13年11月29日	渡辺 浩一	渡航先 ドイツ	目的 シンポジウム「伝統都市と宗教的要素」に出席・報告	期間 平成13年11月26日〜平成13年12月2日	野本 忠司	渡航先 アメリカ合衆国	目的 International	期間 平成13年12月2日
Conference on Data Mining'01について研究成果の発表	平成13年11月28日〜平成13年12月3日	安永 尚志	渡航先 イギリス	目的 古典テキストのデジタル化の動向と方式の調査研究並びに研究打合せ	期間 平成13年12月1日〜平成13年12月10日	鈴木 淳	渡航先 アメリカ合衆国	目的 アメリカ合衆国講演及びシンポジウム出席他	期間 平成13年10月25日〜平成13年10月31日	齋藤 希史	渡航先 フランス	目的 フランス東洋言語文化研究所におけるセミナーで講義	期間 平成13年11月4日〜平成13年11月18日	安藤 正人	渡航先 中国	目的 中国人民大学檔案学	期間 平成13年11月18日



平成14年度共同研究

院主催「第1回アーカイブスに関するPHDフォーラム」で講演

期 間 平成13年11月16日～平成13年11月21日

人事異動

(平成13年9月～平成14年2月) ○平成13年9月30日限り

併任任期满了

文献資料部第五文献資料室

前期併任助教 須田 千里

(京都大学総合人間学部助教)

○平成13年10月1日付け

併任

文献資料部第五文献資料室

後期併任助教 竹村 信治

(広島大学大学院教育学研究科助教)

採用

採用

管理部庶務課庶務係員 崎山 健司

配置換

整理閲覧部情報サービス室受入係

員 野村 龍

(管理部会計課用度係員から)

人情本の所蔵調査

鈴木 圭一 (神奈川県立川崎南高等学校教諭)

佐藤 悟 (実践女子大学教授)

高木 元 (千葉大学教授)

中村 勝則 (尾道大学教授)

山室 誠 (静岡県立藤枝北高等学校教諭)

榎山 裕子 (青山学院大学院生)

二又 淳 (早稲田大学院生)

木越 俊介 (神戸大学院生)

大高 洋司 (国文学研究資料館助教)

高乗勲氏旧蔵古典籍資料の解題目録作成のための研究

三村 晃功 (京都光華女子大学教授)

塩村 耕 (名古屋大学助教)

松田 豊子

松野 陽一 (国文学研究資料館長)

落合 博志 (国文学研究資料館助教)

堀川 貴司 (国文学研究資料館助教)

談義本の基礎的研究

武藤 元昭 (青山学院大学教授)

石川 了 (大妻女子大学教授)

篠原 進 (青山学院大学教授)

山本 卓 (関西大学教授)

神谷 勝広 (名古屋文理大学助教)

宮尾 興男

土屋 順子 (大妻女子大学講師)

岡 雅彦 (国文学研究資料館助教)

和田 恭幸 (国文学研究資料館助手)

わが国における「三言二拍」受容の研究

小川 陽一 (大東文化大学教授)

山口 達治 (神奈川大学教授)

木越 治 (金沢大学教授)

稲田 篤信 (東京都立大学助教)

福田 安典 (愛媛大学助教)

田中 則雄 (島根大学助教)

近衛 典子 (駒澤大学助教)

松野 陽一 (国文学研究資料館長)

入口 敦志 (国文学研究資料館助手)

増補本「和歌一字抄」に関する研究情報出版の出版公開

井上 宗雄 (立教大学名誉教授)

妹尾 好信 (広島大学助教)

古瀬 雅義 (安田女子大学助教)

日比野浩信 (愛知大学短期大学部講師)

蔵中さやか (神戸女学院大学助教)

平成13年度共同研究追加

日本文学における非日本文献と表現法について

山口 博 (聖徳大学教授)

田中 隆昭 (早稲田大学教授)

丹羽 香 (中央学院大学講師)

王 勇 (宮城学院女子大学客員教授)

劉 建輝 (国際日本文化研究センター助教)

松野 陽一 (国文学研究資料館長)

岡 雅彦 (国文学研究資料館助教)

磯 紹壘 (国文学研究資料館客員教授・北京大学教授)

近世東アジアにおける商人と官僚制に関する比較的研究

須川 英徳 (横浜国立大学助教)

鶴田 啓 (東京大学助教)

平川 新 (東北大学助教)

吉田 光男 (東京大学助教)

朴 慶洙 (国文学研究資料館客員助教・江陵大学校副教授)

渡辺 浩一 (国文学研究資料館助教)

山崎 圭 (国文学研究資料館助手)



### 特別共同利用研究員(大学院生)の受入れについて

国文学研究資料館では、当館での研究及び研究指導を希望する特別共同利用研究員(大学院生)を募集しております。

詳細につきましては、昨年十一月月上旬に各大学院へ送付した「特別共同利用研究員受入要項」をご覧ください。又は、当庶務課共同利用係(電話〇三―三七八五―七一三―内線二一〇・二一一)に直接ご請求ください。

#### 概要

受入人数十名程度、受入対象者は大学院の修士課程又は博士課程に在学し、日本文学及び日本史学等を専攻し、文献学、書誌学、史料管理学等に関する分野に興味を持つ学生。

授業料 無料、受入決定は、当館大学院教育協力委員会において審査の上決定し、その結果を所属する大学院の研究科長及び本人に通知する。

研究課題・指導教官(予定)  
・コンピュータを使った古典研究

中村 康夫

・「源氏物語」の異本と異文に関する研究  
伊藤 鉄也

・中古・中世の歴史資料研究  
小川 剛生

・和歌文学の文化史的研究  
松村 雄二

・中世学問史研究  
山崎 誠

・鎌倉期和歌文学と歌人の研究  
田淵旬美子

・中世文学の研究、特に能に関する研究  
落合 博志

・江戸初期の文学と出版文化  
岡 雅彦

・近世文学の研究、特に歌舞伎・浄瑠璃の研究  
武井 協三

・近世文芸の研究、特に歌文に関する研究  
鈴木 淳

・読本の総合的把握  
大高 洋司

・草双紙における芸能受容の研究  
山下 則子

・近世漢文学の基礎的研究  
堀川 貴司

・近代文学の研究  
谷川 恵一

・近代東アジアにおける漢語・漢

文・漢詩

安永 尚志・原 正一郎

・文学情報処理  
野本 忠司

・近現代史料の研究  
鈴江 英一

・近代民間史料の研究  
丑木 幸男

・記録史料学の研究  
安藤 正人

・近世史料学の研究  
山田 哲

齋藤 希史

好・幕府・藩の組織構造と文書群の史料学的研究  
大友 一雄

・近世都市史の研究  
渡辺 浩一

・史料管理学の研究  
鈴江 英一・丑木 幸男

安藤 正人・山田 哲好

大友 一雄・渡辺 浩一

### 夏季セミナー受講生の募集

・情報国文学の研究

当館では、国文学と日本史学を専攻する大学院生(修士課程・博士課程)を対象として、毎年夏

に、「原典講読セミナー」を開講している。

これは一年をサイクルとする特別共同利用研究員(大学院生)の受入れとは別で短期間のセミナーである。

日程等についてはまだ決定されていないが、今年も八月下旬に開講の予定である。募集人員は約十五名、応募者が多数の場合は、当館で選考する。受講料は無料(講義資料については、実費徴収)。

講義の内容は未定であるが、担当者、次の予定である。

松野陽一教授(和歌文学)、山

崎誠教授(中世文学)、武井協三教授(近世文学)、安永尚志教授(情報国文学)、丑木幸男教授(日本近世史)。

このセミナーは、平成五年より開講し、受講生から毎回好評を得ている。研究における視野の拡大と、深化をはかる貴重な機会として、ふるって応募していただきたい。

なお、このセミナーの講義は、「原典講読セミナー」のシリーズとして、臨川書店・平凡社より順次刊行されている。

セミナーについての問い合わせ先は、当館管理部庶務課共同利用係(〇三―三七八五―七一三―内線二一〇・二一一)

内線二一〇・二一一)

# 利用者へのお知らせ

◆「マイクロ資料・和古書目録データベース」の公開について  
 昨年十一月より和古書目録データベースの検索サービスを再開しました。

このデータベースは当館が作成している古典籍の目録データベースの内、当館所蔵の和古書の目録データベースで、現在、約八千件の目録情報を収録しています。

新システムでは、漢字による検索や絞り込み検索等が可能となり、昨年八月に公開を再開したマイクロ資料目録データベースと共に検索することもできるようになり、これを機に、名称を「マイクロ資料・和古書目録データベース」と変更しました。

インターネットで、当館のホームページ (<http://www.nijl.ac.jp>) に接続してご利用ください。「データベース」↓「マイクロ資料・和古書目録」をクリック。

◆新指定の貴重書、特別コレクション

今回、次の資料が新たに貴重書と特別コレクションに指定されま

した。これにより、貴重書は九十六点、特別コレクションは九コレクションとなりました。

### 〈貴重書〉

・忠教 鳥養宗晰筆花押入(写・一軸)

・法華五部九卷書(写・一軸)

・蕪村書簡 几重宛(写・一軸)

・特別コレクション

・仮名遣書コレクション(橋本進吉旧蔵) 十三点

今回、新指定となった資料の書誌事項等、詳しい紹介は、「忠教鳥養宗晰筆花押入」が本誌55号(新収資料紹介)、「法華五部九卷書」と「蕪村書簡 几重宛」が56号(新収和古書抄)、「仮名遣書コレクション(橋本進吉旧蔵)」が57号(新収資料紹介)に掲載されていますので、そちらをご覧ください。

本誌バックナンバーの「新収資料紹介」と「新収和古書抄」は、当館のホームページでもご覧いただけます(「国文研案内」↓「館報」をクリック)。

なお、〈貴重書〉(特別コレクション)の閲覧には「貴重書等閲覧許可願」の申請が必要となります。

◆利用案内

利用資格 学術研究のために当館の資料を必要とする人

利用手続 初めて利用される方は登録が必要です。身分証明書を

持参のうえ、カウンターで登録申請を行ってください。「資料利用カード」を発行します。

閲覧時間 九時～十七時

文献複写受付時間 九時半～十五時半

休室日 ①土曜日、日曜日、祝日、振替休日

②毎月月末(土・日)の場合は直前の金曜日)

③資料くん蒸期間(四月下旬～五月上旬の五日間)

④年末年始(十二月二十七日～一月六日)

⑤蔵書点検期間(三月二十五日～三月三十一日)

⑥その他、館長が必要と認めた日

来館できない場合の利用方法

所属大学の図書館等を通して申し込むことにより、文献複写及び貸出サービス(資料は限定されます)が受けられます。また、個人が郵送で文献複写の申し込みをすることも可能です。詳細は整理閲覧部情報サービス係(内線四五八)にお問い合わせください。

## 開室及び休室日一覧 (14.4.1～14.9.30)

■ 閲覧時間 9:00～17:00		● 印は休室日		■ 複写受付時間 9:30～15:30	
4	5	6	7	8	9
日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土
1 2 3 4 5 6 ⑦	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑	㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘	㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟
⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗	㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞	㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶	㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽	㊾ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿
㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟	㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷	㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾	㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿	㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿	㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿ ㊿

## 平成14年度 春・夏季学会

①事務局 ②開催日 ③会場

(詳細は当館ホームページhttp://www.nijl.ac.jp/参照)

- 解釈学会 ①〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内03-5814-5810  
 ②8月21日 ③國學院大學院友会館
- 楽劇学会 ①〒101-0051 千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル内 03-5275-7767 ②6月2日 ③鎮仙会能楽研修所
- 副点語学会 ①〒155-0032 世田谷区代沢1-20-10 fax 03-3487-4891 ②5月17日 ③東京都立大学
- 芸能史研究会 ①〒602-0855 京都市上京区河原町荒原口下る上生洲町221 キトウビル303号 075-251-2371  
 ②6月9日 ③キャンパスプラザ京都
- 計量国語学会 ①〒167-8585 杉並区善福寺2 東京女子大学3号館3118号室内 03-5382-6339 ②9月7日 ③大阪大学
- 国語学会 ①〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内 03-5841-3813 事務取扱 〒113-0033 文京区本郷1-13-7 日吉ハイツ404 03-5802-0615 ②5月18・19日 ③東京都立大学
- 古事記学会 ①〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内 052-832-2151(代)  
 ②6月15～17日 ③花園大学
- 上代文学会 ①〒142-8602 品川区大崎4-2-16 立正大学文学部906 (近藤) 研究室内 03-5487-3286  
 ②5月18・19日 ③日本大学文理学部
- 昭和文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内 03-3295-1331 ②6月8日 ③文教大学
- 脱話・伝承学会 ①〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学竹原威滋研究室内 0742-27-9272 (fax兼用)  
 ②4月28・29日 ③京大倉庫
- 脱話文学会 ①〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部石黒吉次郎研究室内 044-911-1230 fax044-911-1231  
 ②6月22～24日 ③奈良女子大学
- 全国大学国語教育学会 ①〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101 鳥取大学教育地域科学部内 0857-31-5083  
 ②5月25・26日 ③筑波大学学校教育部・筑波大学附属小学校
- 全国大学国語学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 柳おうふう気付 03-3294-0857  
 ②6月1～3日 ③明星大学日野キャンパス
- 中古文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部日向研究室内 03-3296-2194 (fax兼用)  
 ②5月11・12日 ③聖心女子大学
- 中世文学会 ①〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学文学部石川透研究室内 03-3453-4511(代)  
 ②5月25～27日 ③慶應義塾大学三田キャンパス
- 日本演劇学会 ①〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学文学部芸術学学科演劇研究室内 fax 042-739-8093  
 ②5月24・26日 ③共立女子大学神田一ツ橋キャンパス
- 日本音声学会 ①〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内03-5814-5810  
 ②9月28・29日 ③東京女子大学
- 日本歌謡学会 ①〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学10号館904号宮岡研究室内 078-431-4341(代)  
 ②5月11・12日 ③南山大学
- 日本近世文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部原道生研究室内 03-3296-4545 fax03-3296-4349  
 ②6月8・9日 ③成城大学
- 日本近代文学会 ①〒102-8357 千代田区三番町12 大妻女子大学文学部国文研究室内 03-5275-6074 事務取扱 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内03-5814-5810  
 ②5月25・26日 ③専修大学神田校舎
- 日本語学会 ①〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 075-415-3661 ②6月15・16日 ③東京外国語大学
- 日本口承文芸学会 ①〒150-8440 渋谷区東4-10-28 國學院大学文学部伝承文学研究室内 03-5466-0224  
 ②6月1・2日 ③東京学芸大学
- 日本語教育学会 ①〒101-0065 千代田区西神田2-4-1 東方学会新館 03-3262-4291 ②5月25・26日 ③お茶の水女子大学
- 日本語国語教育学会 ①〒112-0012 文京区大塚3-29-1 日本教育研究連合会第3研究室内 03-3941-3420  
 ②8月3・4日 ③筑波大学附属小学校ほか
- 日本社会文学会 ①〒840-8502 佐賀市本庄1 佐賀大学文化教育学部日本・アジア文化講座 0952-28-8221  
 ②6月22・23日 ③佐賀大学
- 日本比較文学会 ①〒565-0043 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内藤高研究室内 06-6850-6111(代)  
 ②6月15・16日 ③京都造形芸術大学
- 日本文学協会 ①〒170-0005 豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②7月7日 ③日本女子大学
- 日本文学風土学会 ①〒102-8336 千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室 03-3261-7406  
 ②6月22日 ③新宿産経学園(新宿小田急ハルク)
- 日本文芸研究会 ①〒980-8576 仙台市青葉区川内 東北大学文学部国文学研究室内 022-217-5957  
 ②6月8・9日 ③宮城学院女子大学
- 日本文体論学会 ①〒110-0004台東区下谷1-5-34三修社内03-3842-1711 ②6月14・15日 ③東洋大学白山校舎
- 日本方言研究会 ①連絡先1 〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内日本方言研究会幹事 0426-77-2135  
 連絡先2 〒115-8620 北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所気付日本方言研究会幹事 03-5993-7630  
 ②5月17日 ③東京都立大学
- 表現学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 03-3294-2174 fax03-3294-2132 ②6月1・2日 ③桜花学園大学
- 仏教文学会 ①〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学石橋義秀研究室内 075-432-3131  
 ②6月1・2日 ③明治大学駿河台校舎
- 美夫君志会 ①〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内 052-832-2151(代)  
 ②6月29・30日(予定) ③中京大学
- 物語研究会 ①〒182-0033 東京都調布市富士見町2-21-61 サンテラスコア調布5号 室城秀之方 0424-84-5402  
 fax0424-41-7052 ②未定 ③未定
- 和漢比較文学会 ①〒102-8160 千代田区富士見2-17-1 法政大学文学部天野紀代子研究室内 03-3264-9479  
 ②9月28～30日 ③太宰府天満宮